

熊本大学学術リポジトリ

Kumamoto University Repository System

Title	編輯後記
Author(s)	池田, 長三郎
Citation	龍南, 251: 77-78
Issue date	1942-07-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	http://hdl.handle.net/2298/8513
Right	

編輯後記

雜誌部長 池田長三郎

わたくしが「龍南」編輯の責任を持つてからも二年になり本號を以て四冊子を編輯した。今更ながら其の不振の責は、わたくしに在るを思つて無力さを痛感してゐる次第である。わたくしの前には健筆家を以て鳴る八波先生が盤石の重きをなしてゐられたので、その後を未熟者のわたくし如きが安々お引受する場合にはなかつたのであるが、命のまに／＼承けて、河瀬文化部長の御示教を仰ぐことになつた。

その秋、新体制が布かれて、雜誌部は龍南學徒報國團文化部の中に編入せられた。いかめしい肩書がついて、しりごみするやうな龍南人ではないことを「新体制號」が裏づけした。新しく生まれ變つた雜誌部の立場と根本方針とを指示する必要に迫られて、我々は協議の上左の要綱を決定した。

一、「龍南」は全校龍南人に開かれたる綜合雜誌であること。

一、「龍南」は龍南學徒の生ける魂の發露にして、龍南精神の表現たること。

一、「龍南」は五高文化の水準を示し、健全なる文化の建設的努力の結晶たること。

右、三綱領を掲示し、その上に要旨を徹底するため檄を飛ば

して生徒に訴へた。その他、原稿募集の仕方や原稿の採否の方法に關する規約を協議して夫々依頼した。一般の應募原稿は各組長を通じて雜誌部の幹事に提出することになつてゐる。幹事は文理科各一名であるが、原稿の清書、校正など到底二名ではやりきれないので、隨時數名の雜誌部付を依頼してゐる。

かくて雜誌部の新体制も略々整つたが、その運用宜しきを得ることが中々容易ではない。過渡期にあり勝た不滿の聲も聞かなかつたのではない。しかし、その聲は徒らに過去への追慕であつて、將來への明るい希望ではなかつた。しかもそれにも拘らず、「龍南」に愛著をもつ人の言ふ聲であればこそ傳統の生けるものを殺してはならないと反省してみた。「龍南」に關心をもつ人のあるうちは、「龍南」は死なない。「龍南」の死活は時局的と反時局的なるよりは寧ろ「龍南」に對する關心の有無に在るといはなければならぬ。近頃忙しくて執筆の余裕がないといふのも關心の薄い証言である。

人のアルバイトを傍らから批評することは易しいが、自分でつくつてみると意の如く書けないものである。文を綴ることも一種の行ずることに外ならない。自己を没して文に成りきることによつて、反對に文から自分にはたき出して来る。かういふ体験なくして、人文一如の境涯は開かれぬ。「龍南」を媒介として、人と文、文と人との交遊が傳達されるならば「龍南」は我等と共に生ける友である。「文は人なり」とは文を行じ文に

洗練された人文一如の關係を言つたものでなければならぬ。文を書きつけないと臆氣がさして書けなくなる。下手糞なりに書きつけてゐると書く勇氣が出て来て、いつとはなしに練れて来る。

諸賢の健筆を促す次第である。

龍南文化は手近なところから始めたい。案外、手近な日常生活のうちに文學の素材がごろ／＼横はつてゐはしないか。我々の周圍に目を開いてそこに動いてゐる新しい理念を洞察せよ、さうすれば今迄に蔽隠されてゐた新生面が展開されよう。現代に於ける「剛毅木訥」とは、現實態のありのまゝをあらはならしめる表現である。新しい論文や小説に於て、體驗がかく語らせたものなるが故に、否應なしに引付ける作品の魅力に驚きのまなこを見張らせるやうな偉大さに接し度い。

さて、新体制號以來、龍南史上に異彩を放つた作品を回顧しやう。二百四十八號には、後藤傳一郎君の論文「政治と經濟」、部報では厚生部の生活調査、二百四十九號には、林蘊君の小説「出發前」、この號とその次の二百五十號とに短歌のめざましき多數の發表があつた。このやうな秀作をそのまゝ見過すのは惜しいといふので昨年度から「龍南賞」を授與することになつた。「龍南賞」は入學以來卒業までに「龍南」に掲載されたもののうちから特に推賞に値するものを追賞するものである。その第一回授賞者は内藤健君と林蘊君とであつた。内藤君は二百

四十八號に「神話學」、二百四十九號に「西洋武士階級組織の概観」、二百五十號に「史學方法論」の三篇を載せ、林蘊君は二百四十九號に、先の「出發前」、二百五十號に「まごころ」を掲げた。何れも相當の力作であつたと記憶してゐる。

今後益々「龍南賞」の多く出むことを期待して已まない。けれども授賞に値しない場合にはこの賞を保留するであらう。先輩の輝しき業績にはげまされて、先輩を凌駕するは後世畏るべしといはれる所以である。若人の意氣と感激に満てる生の記録をとめて置くのけ今を差置いて又いつの日か負目を埋め合はせ得よう。龍南を巢立つてやがて後の日の想ひ出に今の日の生きの苦しみ喜びの記録が記念碑的意義をもつことにもなるであらう。

終りに、本號には藤井教授の卷頭論文を始め、高木、高森兩教授から玉稿を賜はつて威容を整へることが出来たことを感謝します。内田、森兩君の哲學論文と本井君の科學論文とは、文理科の二大双壁をなすもの。これらが本誌の大部分を占領して折角投稿されても紙数の制限その他の都合上已むを得ず割愛しなければならなかつたものを出したことを御諒承願ひます。